新しい人生を創る

アルコール依存症からの回復には断酒しかありません。その断酒のめざすところは、長い間の飲酒生活により、失われた自分自身、家族関係、そして社会性を正常な状態に回復することにあります。

とはいえ、その社会性は飲酒という習慣のため、本来あるべき水準に比べて未成熟なままである場合も考えられます。また、失われた自分や周囲との関係修復にしても、長い時間を隔てた昔の状態に戻すということではありません。回復というよりは、酔いから覚めた新鮮な心で、新しい生き方を創造すると考えるほうが正しいといえましょう。

そのためには、同じような体験を共有し、そこから立ち直り新しい生き方を求めている仲間が集まる共生社会（自助グループ）に加わることが必要です。そこには、新生のための知恵が隠された宝庫があります。

断酒会について（依存症者支援の輪を広げるために）

断酒会は自助グループとして、その結成以来、アルコールに苦しむ人々が集まり、集団治療の場として互いに助け合いながら発展してきましたが、その存在や実態はあまり世に知られていません。

それは、断酒会は積極的に自身をＰＲすることはなく、酒害に困窮した末に訪れた人達を迎え入れるという、いわば受け身の姿勢を続けてきたことによります。

社会資源としての断酒会に

しかし、日本全国で問題飲酒者 240 万人、アルコール依存症者は 80 万人と推定されている今日、断酒会も本来の設立目的である「酒害の及ぼす社会悪の防止につとめ、広く社会福祉に貢献する」という精神に立ち戻ることが求められています。一昨年来の常習飲酒運転問題対策、増大する自殺者対策問題など、背景にアルコール依存症の存在が指摘される社会問題に関して、断酒会は自らを「社会資源」として活用できるよう体制を整えつつあります。

支援ネットワークの構築

自助グループに求められるのは「安心して失敗できる場であり、家族にも言えない失敗を正直に語れる場」であることです。依存症からの回復には、世界中にたった一つでもよいから、自分に正直になれる、安全な場所が必要とされています。断酒会は概ねこの要件を満たす共生社会を構成しているといえます。

しかし、今日では、うつ病をはじめとする多重障害や、女性酒害者の急増、経済的問題の深刻化というように問題は多岐にわたるようになってきています。経済的・社会生活的に追い詰められている人には行政に、アルコール依存症以外に身体的・精神的な障害を合併している人には適正な医療機関に繋げるよう、他の民間団体も含めた地域の連携ネットワークを構築することが大切です。